

広報
特集

国勢調査にみる 日光市の人口

市民の皆さんとともに、日光市の現況と、これからの問題点を考えようと、九月号で「市政の素顔」を特集しましたが、今月号では、十月一日現在で行なわれた「国勢調査」の結果概数を基に、近年、減少を続けている日光市の人口について、その現状とこれからの課題を取り上げることにしました。

ただし、ここで公表する昭和四十五年国勢調査の数字は、市が取りまとめた概数であるため、後に総理府統計局が公表する数値と、幾分相違することがあります。

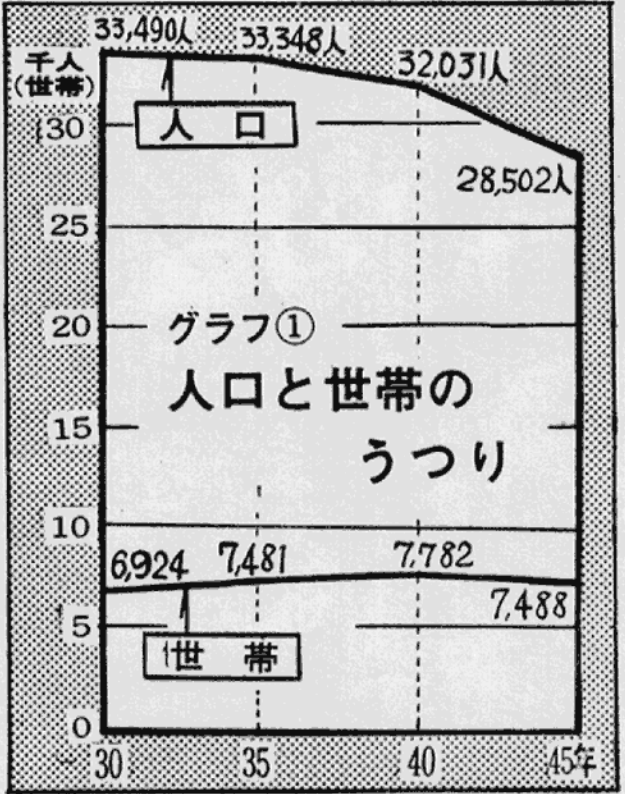
市の人口二万八、五〇二人に 五年間に一一％の減少

日光市の人口は、昭和三十年国勢調査人口三万三、四九〇人を頂点に、以後は減少を続けており、今年十月一日に行なわれた国勢調査では二万八、五〇二人と、五年前、四十年に行なわれた同調査人口三万二、〇三一人より三、五二九人(一一・〇％)も下回る、予想外に大幅な減少をみました。

国勢調査は、五年毎に国が行なう指定統計調査ですが、市制施行後に行なわれた四回の国勢調査での、日光市の人口と世帯数の推移をみたのがグラフ①です。

グラフでわかるように、最近五年間の人口減少が特に大きくなっています。

このように大幅な人口減少の要因がどこにあるかは、年齢構成や、就業者の産業構成など、詳しい結果が出てからでないと



人口増加から減少に
奥日光(湯元・中宮洞)
市内でも典型的「観光地」の

特性を持つこの地域の人口は、その流動も激しいと思われませんが、これまで観光事業施設の増加などで、人口も伸びてきたものが、今回の調査では四十年の人口二、六八七人より二九六八(一一・〇％)減少し、二、三九一人となりました。

減少の原因として考えられることは、①会社保養所など観光事業施設の増強が、一応頭打ちの状態となった。②物産店や旅館などの従業員のうち、住み込み従業員が減少した。などがあげられます。

しかし、近年の観光客数の増加などからみて、この地域が観光地として今後も発展していくことは必至であり、市も、昭和五十年までに、湯元および中宮洞を合わせ、約二、〇〇〇台の駐車能力を持つ駐車場新設計画を進めるほか、高地陸上競技場としての「二荒山外苑陸上競技

場」の整備促進、菖蒲ヶ浜地区のレクリエーションエリア形成計画など、自然との調和を保ちつつ、近代的観光地づくりに力を入れていく方針です。

人口減少率21％ 細尾・清滝地区

細尾町から清滝安良沢町までのこの地域は、古河電工日光電気精銅所、古河アルミ日光工場

の二社を中心とする重工業地域ですが、今回調査の結果ではこの地域の総人口は九、五六四人となり、前回、四十年の人口一万二、一三〇人に比べ、二、五六六人(二一・二％)という大幅な減少を示しました。

この減少率は、昭和三十五年から四十年にかけての減少率一、三二二人の約二倍に当たるものですが、特に安良沢町(五六八人減)、和の代町(五四四人減)、新細尾町(四七三人減)など、古河電工社宅地区の人口減少数の大きいことが目立ちます。

人口増加続く 久次良・花石地区

この地域は、元来「西町」に含まれる地域ですが、近年、住宅地として変化の著しいところから、特に抜き出して取り上げることになりました。

昭和三十五年から四十年にかけて四四一人(三四・八％)の増加をみた同地域は、今回調査でも四十年に比し二九〇人(一七・〇％)の増加で、人口一、九九八人となり、小来川全地区の人口(一、六二一人)を上回りました。

この地域の人口増加は、住宅の増加によるものであり、それが市内の他地区からの転居が主であって、市全体の人口増に対する寄与率は低いとしても、住宅、特に「持ち家」の増加は、市の定住人口の増加につながるもので、市人口の将来にとって明るい材料といえます。

宅地少なく人口漸減 西町地区 (久次良・花石を除く)

久次良町と花石町を除く西町地域は、二社一寺を中心とする観光地域と住宅地域を合わせた地域ですが、世帯の細分化が進むに加え、新しい住居ので、